

## 2 数学における学習行動

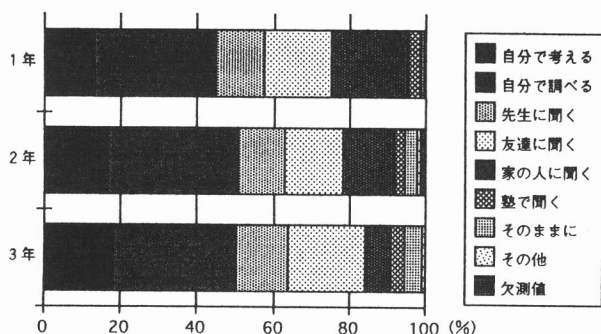
ここでは、最初に数学の文章題を提示して、普段の学習行動を想起させながら、回答させた。

A君は、家から学校まで行くのに、歩いて行くより自転車の方が30分早く着く。歩く速さを時速4Km、自転車の速さを時速12Kmとする。家から学校までの距離を求めなさい。

### (1) 問題の意味が理解できないときどうするか

「自分で考える」「自分で調べる」と答えているのは、ほぼ半数である。

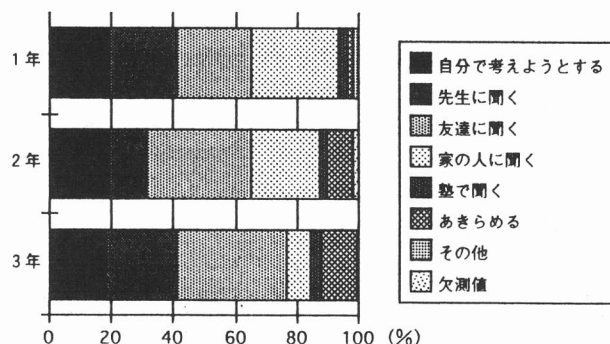
問題の意味が理解できないとき、どうしますか (学年別)



### (2) なかなか式ができないときどうするか

あくまで「自分で考えようとする」生徒は、少ない。学年が上がるにつれ、「きく」対象が、家族から友人に変わっていくのも自然なことであろう。

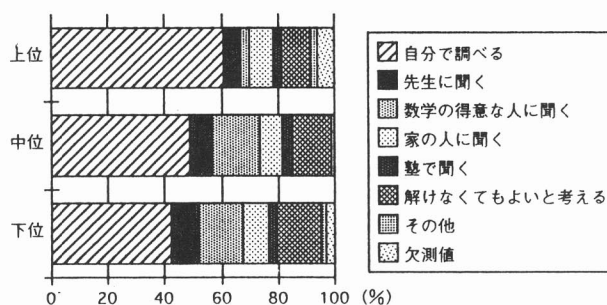
なかなか式ができないとき、どうするか (学年別)



### (3) まだ、習っていない問題にあったとき、どうするか

成績の、上位、中位、下位、それぞれの反応は、グラフのとおりである。50%前後の生徒たちが成績にかかわらず「自分で調べる」としている。

まだ習っていない問題があったとき、どうするか (成績別)



## 3 まとめ

数学について調査する前に、仮説的に考えていたことの一つは、小学校3年生あたりから始まると思われる「算数嫌い」である。これは、この頃から分数や小数点の計算が始まることから、見当がつくことであった。調査の結果は、見事にそれを裏書きしている。

意外であったことの一つは、中学1年生時における数学の「明るさ」である。「どちらかといえば」という留保つきであるものの、70%前後の生徒が数学は「楽しく」「分かりやすい」と答えているのである。そして、それと関連して、数学を好きになった時期としても、中学1年時は大きな意味を持っている。

「数学嫌い」が問題になっているが、数学を嫌いになった時期と、数学が好きになった時期が、ほぼ同じ頃であることは、注目されて良いであろう。また、その理由として共通に最も大きな要因として挙げられているのが『授業』であることも、はなはだ示唆的であると言えるのである。